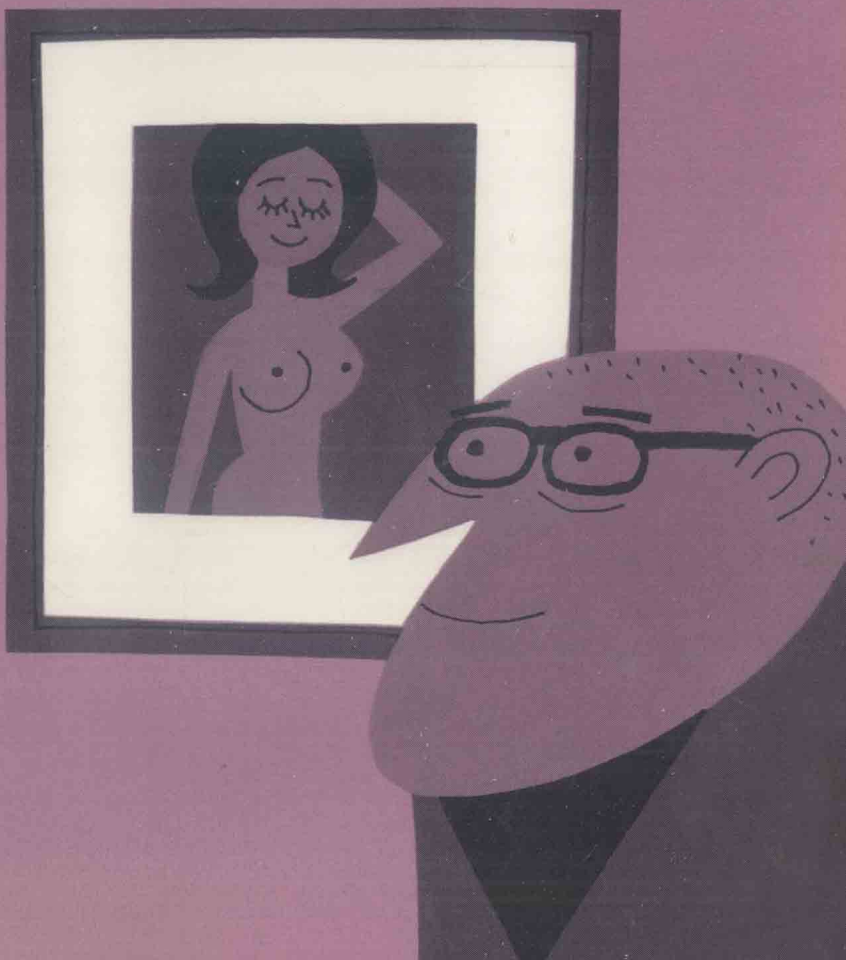
展覧会の絵

男性自身シリーズ

山口 瞳



展覧会の絵

男性自身シリーズ

山口 瞳

新潮社

展覧会の絵（てんらんかいのえ）■男性自身シリーズ15　■定価八〇〇円

昭和五十五年一月三十日発行　昭和五十五年三月十日二刷

© Hitomi Yamaguchi, Printed in Japan, 1980.

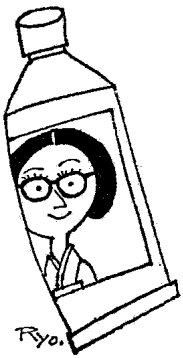
著者——山口瞳（やまぐちひとみ）
発行者——佐藤亮一
発行所——株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一　郵便番号＊一六二
電話＊業務部　東京（〇三）三二六六—五一一一
編集部　東京（〇三）三二六六—五四一一
振替＊東京四—八〇八
印刷所——二光印刷株式会社　製本所——植木製本株式会社

＊乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

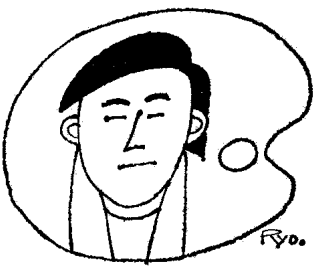
＊目次＊＊＊

銀座暮し 9
足のむくまま 14
東京の人 19
見るだけの… 24
中村屋のおばさん 30
ホテルの五十四日 35
出版は文化事業か 40
歯医者復活 45
展転反側 50
相撲場で 55
展覧会の絵 60
宴のあと 65
怪奇館 70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



運命やいかに 75
老人ばかり 80
紅白の鯉 85
病人になりたい 90
銀杏の頃 95
同期会の頃 100
写生旅行 106
披露宴 111
出来ない 116
年末年始 121
人疲れ 126
暑いわぁ 132
初場所五日目 137



襖の引手 142
この家の庭 146
行司が一人、正面を 151
直立人間 157
山本周五郎十三回忌 163
母帰る 168
二月二十六日 173
寒庵 179
歯なし 184
杏の花 189
浦安町境川水門附近 194
花見の会 199
頑張れ西武ライオンズ 204

ライオンズ狂い 209
西武ライオンズ球場 214
わからないこと 219
一木一草 224
嘘 229
三十年 234
滝田さん 239
新装開店 244
新装開店の旅 249
虫籠 254
吉野秀雄先生十三回忌 260
銷夏法いろいろ 266
父の十三回忌 271

装幀
カット

柳原良平

展覧会の絵

男性自身シリーズ15

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

銀座暮し

家を改築することになったので、自宅にはいられなくなった。そのうえ、いよいよ、長いものをまとめて書かなければならない時期になったので、この機会に、どこかへ籠ろうと思った。

奥多摩の行きつけの旅館でもいいし、どこか温泉宿でもいい。しかし、それだと、建築家との連絡に支障をきたすおそれがある。以前は、家の近くに静かで便利な旅館があったのだけれど、そこは火事で焼けてしまった。いろいろに考えた末に、銀座のホテルにきめた。銀座と言っても、築地寄りのはずれのほうになる。そのホテルの近くに、ごく親しくしている小料理屋と寿司屋とラーメン屋がある。これで食事のほうも、なんとかなる。

七月一日の土曜日にホテルに入ることになって、歌舞伎座の前を歩いていると、本日初日という大きな垂れ幕がさがっている。土曜日は映画館の封切日でもあって、なんだか縁起がいいような気がした。

改築というのは初めてのことであるけれど、結婚以来、引越しを八回やっている。どのときも、私は家にいなかった。いたとしても手伝ったりはせず、トラックの上乗りがせいぜいのところである。女房に済まないという気がするが、家のなかのことは女房の分担になるので、専門家のことは専門家にまかせようと思った。いまの若夫婦では、こうはならないだろう。大正生まれの一得である。

*

長期滞在になるので、ぬかりなく準備したつもりでも、忘れたものがあったり、必要になってくるものが生じたりする。日本史年表、漢和辞典などもそれである。

まだ梅雨が明けていなくて、町を歩くと、下着もシャツも、すぐに汗で濡れてくる。サルマタ、ランニングシャツ、ステテコ、靴下を少し余計に用意しなくてはならない。半袖の丸首シャツにスポーツシャツも必要だ。室内履きもほしいのだが、これは我慢することにした。

エンピツ、消シゴム、ホチキス、吸取紙、封筒などの文房具類も必要になる。ライター、ツメキリ、ヒゲソリブラシ、チューブのハミガキも買う。胃腸薬、頭痛薬、それにアリナミンも買った。薬はすべてオマジナイのようなものである。絶対に必要なもので、絶対に買うまいと思ったものにウイスキイのボトルがあった。理由は言わない。

このなかで、金目のものは、丸首シャツとスポーツシャツである。むろん、ピンからキリまであるが、ホテル暮しなのだから、気分から言っても、少しは上等のものにしたい。

それで、それを最後に買うことにして、かなり名の通っている洋品店に向って歩いていった。

そのとき、不意に、柴田錬三郎さんのシャツはどうなっているのかなあと思った。柴田さんのダンディズムとお洒落は、かなり有名になっている。あのシャツはヴァレンチノではないかと思っている。もっと親しくしていたのだったら、貰いに行くのになあと思った。

瀬戸内晴美さんが剃髪されたとき、女房は、あの着物はどうされるのかしらと言った。そのことを思いだして、ちょっとおかしかった。

*

初めて文士劇に出演したとき、柴田さんと楽屋が一緒になった。このとき、柴田さんが何でも一人でおやりになるので驚いた。奥様もお嬢様もいらっしゃらない。角帯も自分でしめられるし、脱いだ着物を手際よくたたむ。それで、例のへの字にむすんだ口でもって、無言で楽屋の隅に正座している。

私たちの部屋は流行作家が多くて賑やかだったのであるけれど、柴田さんの坐っているところだけがシンとしていた。まさに、柴田さんが好んで色紙に書かれたという「浪人の肩とがりけり秋の暮れ」の雰囲気だった。その感じは、実に独特である。

その文士劇での演目は『忠臣蔵』だった。私は、柴田さんに、『忠臣蔵』を赤穂の言葉のナマリでもって書いたらどうだろうかと言った。姫路から赤穂あたりにかけての言葉のナマリは、あまりキレイではない。

「うん、それは面白いなあ」

と、柴田さんが言った。目が輝き、身を乗りだすようにされた。「週刊文春」に連載されて絶筆となった『復讐四十七士』は読んでいないのでわからないが、その頃から腹案があったと思われる。

柴田さんは、気難しい人であるとされていて、私も取りつきにくい感じがあったが、私に対しては常に優しい目を向けられた。このあいだの、きみの書いたアレ、本当に俺もそう思うなあ、といったことをボソッと言われる。

文士劇に出たころ、こんなことがあった。恥ずかしいけれど、書いておく。

柴田さんと酒場で酒を飲んでいた。女房も一緒だった。私が席をはずしたとき、柴田さんは、こう言ったそうである。

「山口くんは、いい小説家だから、大事にしてあげてください。それで、俺がそう言ったということを、俺が死ぬまで、だまっていてください」

そのとき、柴田さんは、とても怖い顔をしたそうである。真剣な表情であったそうだ。だから、私は、そのことを、柴田さんの死後、はじめて聞いた。

柴田さんのダンディズムは、こういうところにあると思う。また、そのことが、いかにも眠狂四郎ばりの殺し文句になっているところが面白い。女房に対しても、私に対しても……。

ただし、柴田さんのお洒落は、言ってみれば、私の趣味じゃない。私は、ひそかに、あれは佐藤春夫の影響ではないかと思っている。だから、ヴァレンチノうんぬんの件は冗談である。

*

親しくしている寿司屋から、ソバ屋とコーヒー屋とカレーライスの店を教えてもらった。これだけあれば万全である。私は、ホテルで食事をしたり、ルーム・サービスで頼んだりするのを好まない。ホテルで食べると、勘定書が千九百二十三円という端数がついていた

りして、何だか損をしたような気分になる。

まったく経済的な理由から、外の見えないシングル・ルームで暮している。自分を牢屋にとじこめたいという気持が、ちょっぴり加わっている。

ホテルの屋上は、ビア・ガーデンになっていて、午後三時頃から音楽が鳴りだす。五時頃からバンド演奏がはじまる。若い男女が、さぞかし、賑やかに、楽しそうに生ビールを飲んでいることだろうと思う。備えつけの案内書によれば、地下には、バニー・ガールのいる酒場があるそうである。そういうところにはさまれて仕事をしているのだと思うと、妙な気分になってくる。この長い原稿が完成したら、一人で屋上へ行き、地下の酒場へも行ってみようと思う。

ホテルにいると、家にいるよりはずっと規則正しい生活になる。第一、必ず髭を剃らないといけない。掃除中は近くへ散歩に出る。このホテルには二十四時間営業のスナックがあって、午前二時頃、ビールを一本飲んで寝るとよく眠れることを知った。

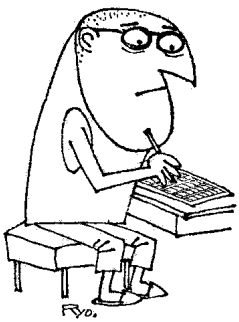
柴田さんも、ホテル暮しの多い人だった。もちろん、私のような狭い部屋ではないだろうけれど、白い壁にむかって仕事をしていると、柴田さんのようなニヒリストでも、自分の死の予感に怯えることがあっただろうというような気がしてくる。そう思うと胸が痛くなる。私が、深夜、スナックへビールを飲みに行くのは、それがあるからである。

足のむくまま

朝起きる。顔を洗う。もしくは入浴する。トマト・ジュースを飲む。散歩に出る。この散歩は、あまり早く帰ってくるわけにはいかない。ホテル暮しであって、その間に部屋の掃除をしてもらわなければならないからだ。「掃除をして下さい」というグリーンの札をぶらさげて出掛ける。

ホテルを出ると、まず、むっとくる熱気に驚かされる。外は暑いのである。それに、排気ガスが物凄(ものすご)い。ホテルの前が高速道路になっている。インターチェンジもあり、成田にも羽田にも便利なところだから、その方面の客が多いのである。

この高速道路は、昔は川だったところである。東劇や演舞場に船乗りこみが行われたことがあった。歌舞伎座も近い。新富座に出演していた六代目菊五郎は、この川で泳いだことがあるそうである。最高のスターが銀座で泳ぐなんていうことは、いまでは、とうてい信じられないような出来事である。いったい、日本は、どこまでが、どうなってしまうの



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com